

一章 疑惑

その出来事はローカルのニュース番組でも伝えられた。

小学六年生の女の子が、近所の石段を踏み外して転げ落ち、即死したという痛ましい事故だった。

朝の通学途中での出来事で、小学校では大騒ぎになったのだ。両親は泣き崩れ、クラスの生徒たちも沈痛な表情を浮かべていた。

「私のせいです……私がもっとちゃんと止めればよかったです。一番仲のいい友達でした。朝、学校へ行く途中でマヤちゃんが近道しようって言いだして、あの石段を駆け下りたんです。マヤちゃん私を置いて先に走っ

ていっちゃって、階段を踏み外して、転げ落ちちゃったんです」

泣きながらそう答えたのは由香里だった。「ごめんなさい、本当にごめんなさい」と泣きじゃくる由香里に対して「大丈夫だよ、由香里ちゃんのせいじゃないからね」とマヤの両親は慰めた。

事故のあった日から、始終沈み込んでいる由香里に対して、母親の加奈子もかけてやる言葉がなかった。

由香里とマヤは大の仲良しで、その子が目の前で石段から転げ落ちて亡くなったのだ。そのことは娘の心に大きな傷を残したに違いなかった。明るくなれと言う方が無理な話である。

加奈子はただ由香里を抱きしめて、元気づけてやるしかなかった。

「大丈夫だよ、由香里……あなたのせいじゃないからね。元気出しなさい」
なんの慰めにもなっていないと判っていたが、そんな言葉しか口から出

てこなかった。

学校でも由香里はすっかり元気をなくし、授業中でも時おり涙することがあった。そのたびに担任の海藤隆二先生は彼女を慰めた。彼はまだ経験の浅い、二十六歳の先生だった。

「杉山、そんなに自分を責めるな。一緒にいたからって助けられるもんじやないから。それよりも笑顔でいなさい。亡くなったマヤちゃんだって、きつとそれを望んでいるはずだ」

由香里は海藤に抱き着いて、その肩で号泣した。しっかりと海藤の体の手を回して泣いている。海藤も泣いている子をあやすように「よしよし」という具合に背中をポンポンと叩いてやった。

クラスの皆からも由香里は氣遣われて、勇氣づけられていた。休み時間

になると由香里の所に集まってきて、皆が話しかけてくれるのだった。そして遊びに誘ってくれるのだ。

「由香里、ケーキ買ってきたわよ。一緒に食べよう」

仕事から帰ってきた加奈子が由香里に言った。落ち込んでいる娘を少しでも元気づけようと加奈子も必死だった。

それを小皿に移して、二人で食べた。

「おいしいね」

加奈子は一口食べて、笑顔で娘に話しかけた。由香里は「うん」と言うだけで、あとは何も言わない。

「あ、そうだ。イオンの中に新しいスイーツの店がオープンしたんだって。今度一緒に行ってみようか」

「うん……」

